

中山道太田宿

今から約400年前

人の歩く速さで、時が流れていた時代

中山道太田宿は、誕生しました。

雨が降れば、旅籠^{はたし}で何日も足止めにあい

木曾川を渡れる日を指折り待っていたのでは……

やがて、雨も上がり旅人は、江戸へ京へと足を運びました。

太田宿は、400年という時代の変遷の中で

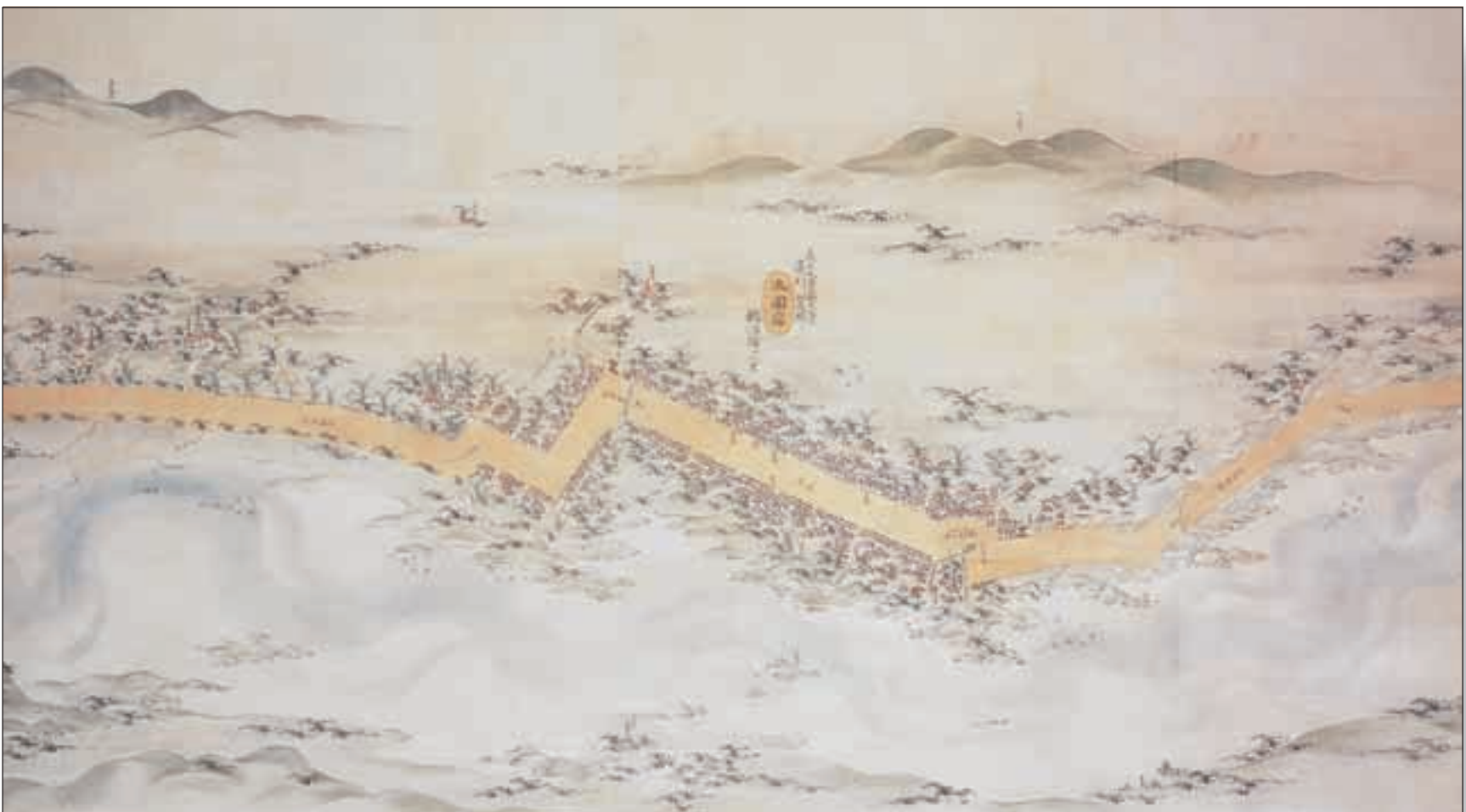
新しい時代の夜明けを

いつも静かに見守ってきました。

今年、中山道宿駅制定400周年。

「中山道分間延絵図」東京国立博物館収蔵

この絵図は、寛政から享和年間（1789年から1804年）にかけて調査して書き上げられたものです。当時の宿場のようなすがすがしく描かれています。これによると太田宿は、現在の祐泉寺付近から下町付近となっています。その後、宿場は東に伸びたものと思われる。



中山道の三大難所といわれた「太田の渡し（木曾川）」。昔も今も交通の要衝には変わりません。

慶長五年（1600年）関ヶ原の戦いで勝利した徳川家康は、翌年、政治・軍事の面から交通路体系の整備を重要課題と位置づけました。

まず、江戸と京を結ぶ東海道の整備に着手。続いて慶長七年（1602年）中山道の整備に着手しました。公用で伝馬手形を与えられた者が、各宿で準備された馬を無償で使用できるよう整備したもので、宿駅伝馬制といわれます。この宿駅伝馬制を慶長八年（1603年）の開幕前に着手したことから、家康は、街道の整備を重要視していたことが伺われます。

なお、東海道五十三次、中山道六十七次が確定したのは、参勤交代制度が確立された寛永年間（1624年～1643年）の中頃といわれています。

太田宿の記述について現存する最も古い文書は、慶長十五年（1610年）八月、検地の際木曾川の太田の渡しの船頭八人の屋敷を承認し保障したといわれる「太田渡船頭屋敷安堵状」とされています。

なお、御嵩（嶽）宿は中山道でも最も早い慶長七年（1602年）に、大湫宿は慶長九年、細久手宿は慶長十一年に開宿した記録が残されています。

参考文献：美濃加茂市史、御嵩町史、可児町史